

「ただいま……」

あるアパートの一室に疲れた青年の声が響く。その声に答えるものは居ないと思われたが、

「……！……！」

何か物音が聞こえてくる。

青年は一人暮らしであり、同棲しているような恋人もいない。つまり今その一室の中には誰もいるはずがない。疲れた体に喝を入れ、声のする方にそり、そりと音を立てないように奥の部屋へと向かう。そして今日遅刻ギリギリだった為に半開きになったままのドアから中の様子をうかがうと……

きめえ丸がテーブルの上のお菓子をモソモソと食べていた。

玄関は閉まっているのにどうやって中へ？と思ったが空いている窓を見ると解決した。洗濯物を干した時に少し開いたままになってたんだな……不用心なことだ……

とりあえずこの不法侵入のきめえ丸をどうしてくれようか、と思いつつ、そっとアパートを出て外から窓をしっかりと閉める。それからまた部屋の中に入り、とうとうご対面。

「やあ、きめえ丸」

「おお、これはこれは、おじゃましています」

特に逃げる様子もないきめえ丸。少し拍子抜けする。

「きめえ丸はなんでここにいるんだい？」

「かつてにはいってすいません。まどからいいにおいがしたのでついついと。しかしいいにおいのしょうたいがわかりません」

「良い匂いの正体を探していたけど途中でお腹が空いたからお菓子を食べた、ってところかな？」

「かつてにたべてすいません、おいしかったです」

申し訳なさそうな顔だが若干頬は緩んでいる。本当においしかったんだろうな。

「しかしおにいさん、このにおいはなんなんでしょう？」

「ああ、これはね、多分これの匂いだよ」

そう言って僕は黒の密閉容器からとあるものを取り出した。

「おお、このにおいこのにおい、これはまめ、ですか？」

「やっぱりそうか。そうだよ。豆は豆でも珈琲豆。これを粉にすると香りが広がるんだよ。君はこの匂いに釣られてやってきたんだね」

「こーひーとはなんでしょう」

「飲み物だよ。きめえ丸、飲んでみるかい？」

「いただきます」

そして僕は珈琲を淹れてあげた。せっかく出すからには機械ではなく自分の手で淹れてあげる。

豆をミルで挽き、ドリッパーにはフィルターペーパーをセットして粉を入れ、一度沸騰させて少し冷ましたお湯でドリップする。ゆっくりはきめえ丸といっても苦いものはあまり好きではないだろうからガムシロップとフォームドミルクで甘いカプチーノを作る。

ドリップする時にお湯で広がる香りにきめえ丸が

「おお、おお」

と反応するのにクスリと笑ってしまった。

そして出来上がったカプチーノをきめえ丸に出す。

「さあどうぞ。味については感想を聞かせてね？」

「いただきます」

器用にカップを傾けて一口飲む。そしてカップをテーブルに置く、と同時にきめえ丸が激しく体を左右に振り出した。

「どうした?!まさか口には合わなかったか？」

「おお、おお」

それから少し間をおいて……

「おいしい!おいしい!」

普段のきめえ丸からは想像も出来ないほど声を荒げて「おいしい」と言ってくれた。

「そうか!それはよかった!君においしいって言ってくれて僕も嬉しいよ!」

それからクッキーを戸棚から出してきて一人と一匹でのんびりとカフェタイムを満喫した。

そして珈琲も飲み終わり、きめえ丸もそろそろここを出る素振りを見せる。

「きめえ丸」

「なんでしょう」

「君はこれからどこへ行くの？」

「わたしはいえをもっていないから、うまれてからはずっとたびをしてきました」

「そうか。よかったらさ。また珈琲を飲みに来てよ。いつでも歓迎するよ」

「おお、かんしゃかんしゃ。どうもごちそうさまでした。またまいります。」

そう言って開けてやった窓からきめえ丸は飛び立っていった。

「きつとだぞー!」

ご近所の迷惑も考えずに大声で飛び立っていくきめえ丸に叫んだ。

あのきめえ丸はまた来てくれる気がする。予感というより確信に近いものを青年は感じた。

そして翌朝、目を覚まし、窓を開けて目覚めの一杯のコーヒーを淹れていると窓から丸い物体が飛び込んできた。

「おはようございます。きよくだしいきめえまるでございます」

まさか翌朝に来るとは思わなかった。

- さすがきめえ丸www -- 名無しさん (2010-03-19 18:10:47)
- ちwやwっwかwりw！wきwめwえw丸www -- 名無しさん (2010-07-07 16:33:18)
- もう一緒に暮せよww -- 名無しさん (2011-01-06 12:28:14)

名前:	<input type="text"/>
コメント:	<input type="text"/>

投稿